
ネットゲアの世界よ、ようこそ！(仮題)

ReiLei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネトゲエの世界よ、ようこそ！（仮題）

【Nコード】

N1926Z

【作者名】

ReiLei

【あらすじ】

世界最大規模のVRMMORPGは突如として現実を侵食する。それを動かしていた正体不明の謎の機械、全ての元凶であるイグドラシル・システムのroot権限奪還を目標にプレイヤー達が頑張る（かもしれない）。別に2次創作ではないです、拍手メッセージには活動報告で回答します。

その日の朝も、随分と冷え込んでいた。

朝8時過ぎということもあって気温はいつものように一桁前半。

そもそも日中帯ですら二桁になることはない、そんな日が続いている。

この部屋は分厚い断熱材や2重窓などの北国も真つ青な過剰装備しかし、暖房を入れていないのだから、それなりに寒さには強いはずなのに外と大して変わらない程度に寒かった。

暖かな廊下からドアを開けた途端に流れだしてくる冷気に彼女は身を震わせる。

肩下で切り揃えた、今時珍しいコシのある黒髪。

猫のような少々つり目気味な目が性格に反して、キツめの印象を与えている。特徴らしい特徴のない、それでも可愛いかわ愛くないかと言えば、それなり以上には可愛い部類に入る。それなりに恵まれてはいても、贅沢を言えば『もう少ししおらしい顔立ちのほうが良かった』と、彼女はそんなことをいつも思う。

そして、どちらかと言うと穏やかな性格の父親に似て大人しい印象の兄を羨ましく思う。

「せめてタイマーくらい入れておきましょうよ……」

エアコンが付いているというのに、まともに活用されていないことを嘆く。

ベッドの上に無造作に置かれているリモコンを操作して起動する。流れだしてくる暖かな空気が心地よかった。

「兄さん、いい加減起きなさいよ。聞いている？」

彼女の声に反応して、ふかふかの羽毛布団がもぞもぞと動く。

「あと10分……いや30分」

彼女はまどろみの中で毛布に包まれて、お約束のように呟く声にただ呆れる。

聞き慣れているようでどこか違和感のある、いつもよりどう見ても音程の高い声に奇妙な違和感を感じ取る。結子の兄である悠早は男性としては少々音程の高い声の特徴であった。しかし、毛布の間から漏れる声は、それよりも更に高い。

まるで、女性のような澄み切った柔らかな声音。それは割りと彼女にとっては聞き慣れた声。

「なんで伸びるのかなあ……って、え？ え？ うん？ あれっ？」

彼女の目が羽毛布団と毛布の隙間から覗いている、余りに長い淡い青みがかった銀の髪が存在を見つける。

明らかに日本人のモノではない髪。

それも恐らく、女性のものだと彼女は断言できた。

「……………えっと、これはどう理解すればいいのでしょうか？」

頭をフル回転させても思考がまるで追いつかない。

彼女は様々な可能性を思い浮かべては、それを片っ端から否定していく。

（まさか兄さんが女の人を連れ込むとか……それはないですね、うん）

それこそマンガやラノベじゃあるまいし、と思考を打ち消す。

(でも、さっきの声って……ないない、ありえない、ありえない)

その声は明らかに聞き覚えがあった。

いや、むしろよく馴染みのある声。毎日のように、下手をすると現実時間よりも遙かに長く聞いている声。高すぎず、低すぎず、派手さはないけれど、澄んだ不思議と良く通る優しい声音。相変わらず無駄な凝り性だと最初は思わず笑ってしまった記憶すらもあるそれ。聞いているとなぜか癒されてしまうような、そんな声。

しかしその可能性は彼女は真っ先に否定していた。

それは常識的に何よりも有り得ない。

まるでゲームかマンガでしか起き得ない、そんな荒唐無稽な話。

「ゆい、10時までには起きるよ……」

悠早はスロー再生するようにそれだけ呟く。

そんなだらしのない様子に盛大に溜め息を吐く。

(いや、今すぐ起きようよ……むしろ叩き起こすべき?)

彼女は大きく息を吸う。

そして吸い込んだ空気の全てを一気に吐き出す。

「兄さん、起きなさい……」

怒鳴り散らす小うるさい母親のように声をあらげる。

そして同時にお約束のように掛け布団と毛布の隅を掴み、バサッという小気味良い音と共に安住の地を奪い取る。勿論、申し分程度に引き剥がされまいと言う抵抗もあった。

ささやかな抵抗も全く無意味である。

「ひゃっ!?!」

まだ冷たい外気に触れて、なんとも可愛らしい声が漏れる。

結子はベッドの上で文字通り猫のように丸くなっていている割りと見慣れた『兄』の姿を微笑ましく思う。そして、『どうしてこうなった?』と問いかける。

その疑問に対する答えはどこからも返ってこない。

人間驚きすぎるとかえって冷静になるらしい。

彼女はそんなことを考えながら、兄であったものの頭から細く長い指の先へ、髪の毛の先、爪先までを繁々と眺める。

不健康なほどに白い肌は血管すらも浮いて見える。

長い髪の毛の色は全体としては銀。

強く光を浴びている部分は淡い青紫。

朝日を乱反射して不思議な輝きを放つ髪に思わず見とれる。

(相変わらず無駄に可愛い……じゃないって)

結子は何度か深呼吸する。

ずいぶんと細く小さくなった肩を揺すりながら叫ぶ。

「……………え、え、えーっと、とりあえず起きて、どうなってるんですっ?」

「ゆい………朝から騒がないで欲しいんだけど……………」

低血圧にはこの寒さは辛い」

「そう言う問題じゃなくて!! 非常事態、エマージェンシー、メ

ーデー!メーデー!」

別に今日は労働者の日ではない。

「うるさいから……脳に響く」

悠早はと言うと呻きながら枕に顔を深く埋める。

そしてモゾモゾと手で結子の手を払いながら、行儀悪く奪い去られた毛布を足で引き寄せようともがく。

すると長い髪が乱れ全身をくすぐるように蠢く。

「ゆい、髪くすぐつたいからやめて、ほんと」

結子は仕方がない、と呆れ気味に肩から手を離す。

「だーから……」

寝返りをうち、2度寝を決め込もうと悠早は身体を動かす。

そんなことをしている間にも妙な違和感が積もって、彼の思考に警鐘を鳴らす。声の高さ、全身に触れる髪の毛の感触、何よりもベッドがいつもよりも随分と広く感じられること。

それが彼を眠りから覚まし、思考を急速にクリアにしていく。

「……………ん？ あれ？ へ？」

悠早はムクリと重い身体を起こす。

ずいぶんはつきりとしている意識に比べて、目覚めを拒否しているような重い瞼を擦る。周囲を見渡し、飾り気のないデジタル時計で今日の日付と現時刻を確認する。

小さく1度だけ頷く。

そのまま視線を天井のシーリングライトから本棚へと這わせる。

最後にロッカーの扉の姿見を見て固まる。

何度も瞬きをして目をゴシゴシと擦る。

「……………え」

啞然とした表情のまま、頬をつねる。

そんな兄の様子を見ながら結子は窓の外へと視線をそらす。

「えっと、何これ？」

「だ、か、ら、メーデーだって言ってるじゃないですか……………」

二人の会話はそこで途切れる。

ただ、鏡の中にはファンタジーの世界からそのまま飛び出してきたような美少女がいた。

美人というにはまだ幼さの残る、そんな可愛らしい顔を歪ませて。

目が覚めたら『女の子』になっていました。

そんな異常事態にも関わらず、二人はそれなりに落ち着いていた。少なくとも泣き喚くことも、錯乱状態になることもなければ、オロオロと混乱してしまうようなことも不思議となかったのである。むしろ、いつものように濃く入れたアッサム茶葉を使用して、シナモンで香りづけしたロイヤルミルクティの香りを愉しみながら、悠悠々と軽食を摂る位の余裕は持ち合わせていた。

悠早は背が縮んでしまったためにかなりダブダブになってしまっているパジャマ姿のまま、何をするわけでもなくブランチと洒落込んでいる。

結子も二人がやっているネットゲの掲示板を眺めながら阿鼻叫喚の様子を楽しんでいた。

「なんか事実は小説より奇なりって言うのかな、こういうのを」

悠早は2杯目を注ぎながら悠長に、相当他人事の口調で呟く。

「兄さん、ずいぶん冷静ですね……」

「赤の他人になっっている、とか気づいたら異世界でした、よりはま
だいいんじゃないかな？」

「それはまた素晴らしいプラス思考ですね？」

程度の問題であるが、少なくとも慣れ親しんだ世界である事に彼
は安心している。

流石に異世界に放り込まれて、悠々と生きて行けるほど彼は自分
が 主に精神的な面で たくましいとは思ってはいない。それ
なりに極一般的な現代っ子だと、そう認識している。それ以前にサ
バイバル能力なんてものがあるようなアウトドア系の人間ですらな
い。

外見が変わったという程度なら、まだ耐えられる範囲の問題であ
った。

むしろそれなりに『慣れ親しんだ』外見であるのだから違和感
皆無といっても良かった。

「でも、掲示板を見てると、同じような状況の人が沢山いるよう
ですよ？」

「そう」

結子はそんな『兄』の様子を見ながら恨めしく思っていた。

彼だけこうして『ゲーム世界』の外見を手に入れたというのに、
彼女はと言えば何も変化がなかったという事実。彼女自身、別に今
の容姿が嫌いなわけではなく、それなりに気に入ってはいる。これ

以上を望むのは贅沢だという思いもある。

それでも彼女が望む姿を実現した姿が現実でも手に入ればよかったのに、とそう思ってしまう。

そしてそんな思考をしている自分に呆れて溜め息を吐く。

「神様って不公平……」

無意識のうちに言葉が漏れる。

「それで、ゆい。今はどうなってる？」

余りにもスレの流れが早く、着いて行くのもやっとと言う状態。

それでも、断片的な情報から彼女は今起きている事象を整理していく。

「TWには昨日の午前2時頃から接続不能になっていて、運営は緊急メンテナンスだと言い張ってるそうぞ」

「緊急メンテナンス……ね？」

「はい、緊急メンテナンスらしいぞ」

悠早の得た容姿はとあるゲームのキャラその物であった。

そのゲームは通称は『TWO』又は『TW』と呼ばれる。

『The WORLD』

それは『真なる異世界を体感する』を謳い文句にしている世界的に人気の高いネットゲ。

それも世界中の100万を超えるプレイヤーが一つの世界を共有すると言う、この2032年現在においても非常識と言われるほどの規模を誇るVRMMORPGである。圧倒的な空気感とリアルさ、

規模などどれを取っても他の同種のゲームからは頭一つ二つ以上抜けた存在。

一部では『オーパーツ』とまで呼ばれる事すらあるシナモノ。

「この状況じゃなければそれで納得したんだけど……ね？」

二人は昨日、大規模なシステムアップデートがあった事を理解している。

そして、こんな状況でなければ大規模アップデートにつきものの『バグ』もしくは『不具合』への対処のための『緊急メンテナンス』で誰もが納得しただろう。

実際にはどう考えてもそれでは収まっていない。

ゲーム中のアバターの容姿が現実反映されている異常事態、有り得ない状況。

少なくとも誰もその明快な原因は知りようもない。

「ですねえ……」

「ある意味不具合には間違いなさそうだけど……でも、美味しい」

彼は暖かな紅茶を、今という時間を精一杯に満たす。

結子は窓に映る彼女自身の姿と、変わってしまった兄を見比べて小さく溜め息を吐いた。

そのままタブレット端末へとそっと視線を戻す。

深夜2時。

普段は静かなオフィスが突如として、文字通りの意味で戦場と化していた。

鳴り響く電話と次々と上がるアラートの発する警告音に、彼は頭を抱える他ない。

一昨日の数年ぶりのゲームエンジンの刷新を含む大規模アップデートの後、何事も無くいつものようにバグ一つ、問題一つなく極めて安定して動作していた。

サービス開始以来、人為的なミスを除けば何一つ問題の発生しなかったシステムの突然の暴走。

それも今では完全に制御を失い、事態は刻々と悪化の一途を辿っていた。

僅か30分前、突如システム管理者ユーザ、つまり全システムにアクセス可能なroot権限の喪失。

それに続く、正体不明の多数のモジュール、機能の起動。

それが何を引き起こすか、根本的に何を司っているのかを誰一人知らない。

そもそもマニュアルすらも存在しない。

「それこそパンドラの箱でも開いたか……クソッ」

男は右手で拳を握ると、デスクにドンという強い音と共に叩きつける。

彼は30半ば、エンジニアとしては正に成熟期。

このゲーム、『TWW』こと『The WORLD』の設計・開発

から携わり、今ではインフラ部隊を率いるリーダーとして多くの部下を指揮する立場。社内ではゲームのインフラについては誰よりも詳しいと、俺にわからないことは他の誰にもわからないと、そう自負していた。

しかし同時に、彼はこのシステムについて『何も知らない』のもまた事実であった。

それを誰よりもよく理解していた。

「一体、何が起こった……………柳沢！ そっちはどうだ!？」

「どうやってもroot権限を取れませんよ……………それどころか数分前からログインすら出来なく!」

「西沢リーダー、フロントは電源を強制的に落としたと報告が入りました!」

その報告に一息つき、思わず肩から力が抜けかける。

しかし、直ぐに気を引き締め眼前に広がる数枚の有機ELモニタへと向かい直す。

「普通の機材なら電源ボタンを落とせばそれで終わる話なんだが……………忌々しい」

彼はサーバールの奥深くに鎮座する箱の姿を思い出す。

一般的なサーバ機器であれば、最悪の場合は電源ボタンを長押しするなどして強制シャットダウンを走らせることができる。それすらも出来ないような状況であれば、最終手段として電源コードをすべて引き抜いてしまえば そんな事態はまずありえないが それで良い。

実際に一般的なサーバで構成されていたフロントエンド系、つまりWebやログインと言ったサーバ郡は電源コードを全て引き抜くことで停止させた。常識的に考えれば有り得ないことであったが、

何故かシャットダウン系の命令を一切受け付けなくなってしまったため、いたための非常措置であった。

これで新規にユーザがゲームへとログインすることは不可能となる。

それだけでは何の解決にもなっていない。

しかしゲーム本体を動かしている機材を止める方法を彼は思いつかなかった。

(だから俺はあんなものを使うのはやめておけと最初に言ったんだ……言わんこつちやない)

TWを動かしている機材は一般的なサーバ機ではない。

それは出自不明、そもそも本来何に使われるべきものなのかすらもわからない。

それ以前に、そもそもこの時代の人間の知識の及ぶ範囲のモノですらもない。

宇宙人や未来人の未知の道具。

この時代にあり得ざるモノ。

人に過ぎたるもの。

オーパーツ。

そう呼ぶのが最も相応しいモノであった。

「原始人にライターを与えたようなものだな……ハハハハハ」

彼はただ、そう自嘲するしかない。

その様子を不審がった部下の一人が憔悴した表情で話しかける。

「西沢さん、あとはイグドラシルを落とせば……」

「不可能だ……あれは落とせない」

「……………はあ」

「今だから言うが、あれを落とす手順・手段は一切存在しない」

その言葉の意味を『理解出来ない』と言う表情と共に周囲の動きがピタリと止まる。

最初期からのごく一部のメンバーを除けば、中枢部であるそれについて知るものは殆どいない。

誰もが、それが何であるかすら知らずに触っていた。

それが現実だった。

「どういう事ですか？」

「そのままだ……あれは人知の及ぶようなものじゃないんだ」

その表情には次第に諦め、達観が混じりつつある。

彼から見れば、このゲームTWは正に奇跡だった。

そんなモノがこの6年と言う長期に渡って何の問題も起こすことなく動作していたのだから……それを奇跡と呼ばずに何と呼ぶだろうか。

大きさで言うと50センチ四方よりも小さい程度の純白の小箱。

精々10Uサイズに収まってしまっ程にコンパクトさ。

その中に、それは想像を絶するような……世界中のすべてのコンピュータが束になっても足元にも及ばない様な膨大な演算能力が秘められているモノ。彼、西沢がその昔に簡単なプログラムで計測してみたところ最低でも現在最速のスーパーコンピュータよりも三桁は高速という目を疑うような結果があった。

彼の予想によれば、それは『世界シミュレータ』の類である。

そう確信できるほどに仮想世界を実現するために都合の良い機能が揃っていたのだ。

「それは説明になってません」

「全くだ」

「……………」
いつもは冷静な、頼りになる上司の顔に浮かぶ複雑な表情が周囲をより惑わせていく。

そしてまるでそんな彼を嘲笑うかのように、システムは彼の画面”だけ”に次々と様々なメッセージを送ってくる。ただ彼を焦らせ、混乱させ、冷静な思考力を奪うように、そんな悪意すら感じさせる。明らかにそれがすでに彼の手を離れたということを見せつけているように見える。

膨大なメッセージが止まっては流れ、投げられては止まり消えていく。

断片的に得られる情報だけでも未知の機能が次々と起動している。

（見せつけているのか……わざわざ、人に判る言葉に直してまで！）

この機械は彼らの希望に応え続けてきた。

あれが欲しいこれが欲しいとそう願えば、その機能が実現される魔法の箱。

薄々ながらもそれが生きている、もしくはそれに意思がある事は少なくとも彼は理解していた。

「あの噂は本当だったんですか？」

「……………」

長い沈黙を破って、ゆつくりと言葉を紡ぎ出した部下に彼は何も答えない。

むしろ、沈黙をもってそれを肯定する。

「あれがどれを指すのかは知らないが、間違っではないだろうか」

急激に場の喧騒が、波が引くように周囲に伝染し収まる。

キーボードの打鍵音が止まり、喧騒が静まり、鳴り響く電話の音だけとなっていく。

彼はこの会社が潰れることは間違い無いだろうと、そんな些細な心配をする。そしてこの場にいる人間の大半は散り散りになって行く。中には再就職が難しい人間もいるだろうと、それも心配と言えば心配であった。

そんな顛末な事を憂いている彼自身に呆れる。

「すでに”あれ”は制御を離れた……何が起こるかわからない」

彼はそう呟いた。

平穏を破るように携帯の着信音が鳴り響く。

キッチンで洗い物をしている結子も珍しい着信に興味をひかれて振り向いている。

結子から見て悠早は人付き合いが嫌いで、友人も少なく、ワイワイガヤガヤと大人数で騒ぐのも好まない。知っている兄の友人と言え片手でお釣りが来るほど、電話をかけてくる相手となるとそれなりに名前が絞れてくる。

事実上は両親と一人だけだと言うことを理解している。

そして恐らく両親のどちらかだろうと彼女は想定する。

二人が中学に上がる頃から、揃ってSE、つまりシステム・エンジニアをしている両親は家に帰ってくるのも遅くなった。それだけならまだしも、デスマに巻き込まれて忙しい時などは月に数回しか

帰宅しない、下手をすると1ヶ月家に戻らない事もざらだ。

電話すらも滅多にかかってくることがない。

たまに電話があると思うと『今タイにいるけどお土産何がいい？』
と言うことも過去にあった。

暫く帰れないといって、3ヶ月も顔を見ないこともあった。

なかなか見事な放置プレーのお陰で、二人は揃って家事は一通り
できるようになっていた。

(今はどこに居るんだろう……)

結子はどこに居るかもわからない両親の事を思い出し、ふと心配
をする。

電話に出るのが心底嫌そうな悠早の表情に苦笑いが漏れる。

「誰だろう……？」

盛大に溜め息をつきながら、悠早はめんどくさそうに手を伸ばす。

そして、表示されていた名前に思わず後悔して、自然と連続で溜
め息が漏れる。

「……って、洋二か」

高校の同級生であり、悪友といっても良い間柄であり、それでも
中学以来不思議と縁の切れる事がなかった……そういう意味では彼
にとっては数少ないリアル友人の一人。しかし、その縁を間違っても
大切にしようとは彼は思っていない。

電話に出るべきか出ないべきかとぐるぐると思考を巡らせる。

どうせ『アキバ行くぞ！』とか、そんな程度のもんだろうと予測
する。

名前を聞いた結子もその瞬間に興味を失ったようで、洗い物へと

戻ってしまつ。

「なんだ、高柳先輩ですか……」

「残念な洋二でした……」

悠早はそう呟くと遠慮無く、問答無用で通話を拒否する。
これも彼にとってはよくあることに過ぎない。

「兄さん、友達無くしますよ？」

「何でこんなに人間関係って面倒なんだろうね……」

「さあ、どうしてでしょうね？」

結子もまた同じようにあまり人付き合いが好きの方ではない。

そもそも、八方美人に愛想を振り撒けるような器用な性格を彼女もしていない。

争いは同レベルの間しか起きない、そんな言葉を思い出す。

「いいけどね……」

悠早のつぶやきを遮って、再び着信音が鳴る。

発信元は先ほどと変わっていない。

「高柳先輩がわざわざ拒否されてもかけてくるって珍しいですね？」

「なんだろうね……」

彼も諦めて通話ボタンを押す。

直ぐに耳元で響いてきた凶太い声に、何度目ともわからない溜め息が漏れる。

(何が楽しく朝からこいつの声を聞かないといけないのか……)

穏やかな午前中の時間の全てが、その存在のお陰で台無しという気分である。

『おい、悠早。今すぐ池袋のライブカメラを見る！！ とんでもないことになってるぞー!!』

「慎司……朝からうるさい」

その女性らしい高い声に沈黙が訪れる。

『つて、お前誰だよ！？ あれ、結ちゃんか？』

「悠早ですけど、何か？」

『……………はぁ？』

「もういいよ、もう」

説明することはおろか、話すことすら億劫になり、容赦無く通話を切る。

そのまま、すぐに機内モードを設定し全ての通信を遮断する。

その様子をしっかりと見届けた結子は、何かがツボに嵌ったらしくクスクスと必死に笑いをこらえている。

遊佐に近づくと、それがいかにも自然に隣に腰を下ろす。

「先輩はなんて？」

「池袋のライブカメラを見ろって？」

「？」

何かが起こっているらしいという嫌な予感が二人の意識に共通して流れる。

平常時ならばすぐに再生が始まるような、大して画質も良くないライブカメラの配信だと言うのに一向に再生が始まらない。自宅側

の回線には余裕があると言うのに、動画の読み込みに随分と時間がかかる。それ以前に配信サイト自体が余りにも重たい。

サーバ側の回線に相当な負荷がかかっていることは明らかだった。不安が募っていく。

「……………!?!」

「……………えっ?」

二人は揃って息を飲み、目を見開く。

言葉が出てこない。

余りにも衝撃的な光景がカメラを通して映しだされている。

街が壊れていく。

玩具や大昔の特撮のセットが破壊されるように、いとも簡単に、ゴミのようにビルが崩れる。大量のコンクリートが砕け、雲一つない空を粉塵が舞って覆い尽くしている。この時代から30年も昔の歴史の転換点となった、二人にとっては歴史でしかない911同時多発テロを思い起こさせるような光景。

余りにも無力で無慈悲な破壊行為。

映画か何かとしか思えないほどの非現実的さ。

その下にどれだけの人がいるのかなど想像もつかない。

数千、下手をすると死傷者、行方不明者は万を超えるかもしれないと二人は思う。

しかし同時にそれは創造的でもあった。

コンクリートで塗り固められた都市を粉碎し、成長を続ける巨大な影の存在。

恐ろしい速度で大地に根を張り、天高く伸びようとすする大樹。

二人はそれがなんであるのかを瞬時にして悟る。

「世界樹《イグドラシル》……？」

ブログ - 02 (後書き)

補足

・デスマ

各所がいい加減なIT業界では、プロジェクトの終わりが近づくと特によくある事。

自家に帰ることも出来ず、現場に缶詰、月労働時間は300近くなることも？

開発系の人たち特に頑張れ、超頑張れ。

現在時刻は10時半過ぎ。

東池袋の外れに突如として出現した世界樹は成長を続けていた。

言葉のままに、街を呑み込みつつある。文明の象徴である近代都市を易々と破壊しながら、天高く伸び続けている。ニュースによれば既に一帯は警察により封鎖され自衛隊の派遣が決定。多数の死傷者・行方不明者が出ているなど、現場は悲壮な状況らしい。

その高さは1000メートルを超えたとの報告すらある。

今ではスカイツリーを遥かに抜いて国内最大の高さに達している。その偉容は、二人の住む港区の高層マンションからはつきりと眺めることができる。

そんな異常事態にも二人は意外と冷静だった。

と言うよりも、慌てたところでどうにもならないと言うのが正しい。

TWについては未だに運営会社からの公式なアナウンスはない。問題のゲームサーバはダウンした状態を保ち、運営会社と揃って不気味な沈黙を貫いている。今はネットワーク的にも切り離されているようで、外部から現状を確認する術は皆無の状況だと言う。

この異常事態にも関わらずスレを見れば『早くメンテ終われよ』やら

『運営、金返せ』やらと中毒者達の罵倒雑言が溢れている。廃人様達にとってはゲームの方が遥かに重要なんだ、と悠早は苦笑いするしかない。そんな彼は彼で、ノートPCに向かって、ゲーム内の友人・知り合いと連絡を取っていた。リアル友人よりもネットの友人を重視する辺り、本人は気づいていないようだが大概である。

それは結子も大差はない。

「兄さん、それ、で」
「うん？」

結子は悠早の肩越しに画面を覗き込む。

昨日までなら現実ではまずあり得ないような距離感。

それでもＴＷの中であればごく普通であった、そんな近い距離。友達同士と言うには少々近すぎ、そっちの人だと思われるかも知れない。兄妹と言うよりは、仲の良い姉妹。容姿はどうみても姉妹には見えないが。と言う表現がわかりやすい。

結子にはいささか季節外れのシトラスの香りが心地よかった。

これも慣れ親しんだモノ。

「今日はどうなったんですか？」

わざと耳に息を吹き掛けるように話しかける。

結子から見ると、悠早が耳元で囁かれるくすぐったさに必死に耐えているのが面白い。もっとも、このくらいでは悠早はゲーム内で慣れたもので反応に乏しいのが彼女の機嫌をほんの少しばかり悪化させる。

視線が会つと、悠早はクスリと微笑んで肩をすくめる。

「えっとね……、ティッシとめーちゃんは来るって言ってたかな？」
「ほうほう」

彼女もよく知る名前が上がる。

どちらも仮想世界内では、あまり一緒に遊ぶと言うわけではないけれど、悠早を通してそれなりに仲が良い。

何の話かと言えば、やけくそ気味の『OFF会』である。

要するに『リアル容姿が変わっちゃった記念』と言うノリの産物。

あまりの危機感のなさに結子は呆れるしかない。

しかし同時に何ともこの面子らしいとも思い、辛気臭くなくても仕方無いしねと一人で納得しておく。

彼女から見て『暇潰し』と言う点では悪くはない。

「二人とも外見変えられたみたいで、楽しそうだったかな？」

「はあ……それはまた怨めしいくらいに羨ましい話ですねっ!？」

今の私なら念力だけで人が殺せそうな気がしますよ、はい」

結子の瞳は微笑んでいるようで笑っていない。

静かな闘志、いや私怨に満ちたオーラに悠早の表情がこわばる。

「眼力じゃ？ って、そんな睨まなくても……」

「はあ……」

彼女は溜め息をつくと、身体を悠早の背に預ける。

さりげなく左手を首に回してくるところに彼は恐怖を感じていた。

今の彼の身体は、仮想世界の身体能力が反映されていれば決して非力ではないはずである。現実的に考えれば細く柔らかい身体の何処にそんな力があるんだとツツコミが入るのは間違いない。

そもそも力が反映されているかどうかと問われれば、不思議と確信を持って『YES』と彼は答えられる。何故か身体がそう教えてくれるような気がしていた。

それならば、同時に結子もまた同じように仮想世界の力を得ている可能性が高い。

そうなった時は必然的に『ster』スキル値が低い悠早が不利である。

「ほんと神様って不公平ですよねぇ？」

「そつだねえ……じゃなくて、別にゆいは可愛いから良いじゃない？」

「私は欲深いんですっ！！」

結子の声が耳を通して脳に響く。

悠早はうんざりした表情に変わっている。

「わかったから、わかりましたから！」

「兄さんは、な・に・も・わかつてませんっ！！」

結子は首に回された腕にゆっくりと、加減しながら、それでも確実に力を込めていく。

少しでも楽になろうと、あわよくば振り払って抜けようともがけばもがくほど状況は不思議と悪化していく。ある人に仮想世界で習った拘束技術であるが、悠早が彼女がそんなものを使えることなど知るよしもない。次第に身体が動かせなくなり、固定される。

仮想世界ならまだしも現実だからこそその恐怖。

悠早は次の行動をシミュレーションするが打開策は思い付かない。そんな表情が彼女の加虐心を刺激する。

「でも月曜からどうしようとか、色々悩みはあるんだから……」

「そーですねー」

「ティツシも会社辞めようかとかぼやいていたし」

「それは大変そうですねー」

結子は抑揚のない棒読みで返し続ける。

それに合わせるように、更に首の隙間が埋まっていく。

力加減を間違えれば窒息、下手をすると首が折れかねない。

「すごい棒読みだね？」

「気のせーです、オー、勘違い、みたいな？そう言う感じですよ」

気がつけば頬と頬が触れ合うほどに二人の顔は近い。

悠早は仮想世界でも滅多に無い程に近い、何だかんだで可愛らしい妹の顔を直視できず、ふわふわと視線だけを彷徨わせる。数秒から数十秒に1度、視線が交差するたびにニンマリと肉食動物的な微笑を浮かべて、何かを伝えたそうにしているのが見える。

そう、彼女はただじつと悠早を見つめ続けている。

彼女が何を考えているのか、何が言いたいのかはさすがに読み取れない。

(なんだろう……WISください)

どうやらテレパシーとか、そういう系統の便利な能力はないらしい。

結子は小さく溜め息をつく、痺れを切らして言葉を発する。

「ところで、私も着いていっていいんですか？」

「ティッシと一緒においでって言ってたよ」

あまりのどうでも良さに、悠早の肩から力がガクリと音を立てて抜けていく。

そんな彼の気も知らずにゆい子は鼻歌すら口ずさみそんなほど上機嫌になり、満足そうにコクリコクリと頷いている。しかし、悠早からするとその動きが頬ずりされているようで、何ともくすぐったくて仕方がない。

それでも、ある程度わかってやっていることだろうと振り払わない。

余計なことをして機嫌を損ねるような度胸は彼にはない。

「あの人は話がわかりますね、うん」

拘束が緩まり、締め付けが優しく包みこむように変わる。

(むしろ拒否する理由がないんだけどね……)

悠早は、自分たちがなぜ彼女……ティッシと呼ばれる人物とどうも仲が良いのかよく疑問に思う。

片や”いろいろな”意味で世界中に名を知られた、ギルドやクラに属さない独立系のトッププレイヤーの一人。方や、平均よりは上だけれど、それほど目立つような事もない一般人。普通に過ごしている限りは接点らしい接点はまず生まれない、それ程の実力差がある。

同じ学校のプレイヤーや昔からの知り合いには七不思議の一つとまで評される。

(ああ、でもSOPのローンどうなるんだろう……流石にリアルマネーで払えとか言われたら泣くよ)

どうでもいい事を思い出しながら、そんな社会人をしている彼女の言葉を伝える。

彼女も相当な甘党好きだと言う事は、近しい間では有名だった。

「なんか美味しい甘いものでも奢ってくれそうだよ？」

結子の表情が、相応の女の子らしく微笑む。

二人は否応なしに散歩がてら歩いていた。

何時ものようにメトロでささつと出られるだろうと思っていたのが、大きな間違いの始まりであった。現実にはメトロは一部の線は終日運休が早々に発表され、他の線も運行を止めている。

その原因は言うまでもなく世界樹の現出である。

東池袋駅近くに突如現れ、急激に成長し巨大化したそれは周囲一帯を破壊し尽くしたと言って良い。凡そ半径1キロメートル圏内が被害に遭い、その中心数百メートルは文字通りに『消滅』の被害を受けている。それは地下空間も例外ではなく『根』によって有楽町線と副都心線は路線の一部区間が崩壊してしまった。丸ノ内線も線路が激しく変形する被害を受けている。

他のメトロ路線は直接的被害はなかったが、念のため運行休止。JRも山手線他が止まってる。

そのため首都圏の交通網は大混乱の様相を呈している。

内閣は非常事態を宣言したものの、有効な対策が打てていると言うには程遠い。流石に都心のだ真ん中を食い破って大樹が生えてくる自体を想定しろと言うのも無理があるので多少は同情の余地がある。死者・行方不明者は休日だったこともありまだ少ないと言われているが万を越えるのは間違いない。負傷者はその数倍にも達するだろうが、治療する人手は圧倒的に足りていない。

被害総額は計算するのもアホらしい額だろうと言える。

ここまでの混乱は2021年の関東震災以来だろう。

そんなわけで二人はオフ会集合場所の有楽町駅まで歩く。

そこまでしてオフ会がしたいのかと問われれば答えは、どちらかと言えば『NO』であった。その割りに何故こうして出歩いているかと言えば、他にやることを思い付かなかったと言うことが大きい。二人とも何もなければ、休日は仮想世界にすることが多い。

そのTWがサービスを停止しているので、要するに暇なのである。

わ「すごい目立っている気が……まさか外人の気持ちができる日があるなんてね」

悠早の今の容姿は否応なく日本では目立つ。

可愛らしい顔立ちに、不思議な輝きを放つ淡い青みがかった銀髪。サイズの合っていない大きめの濃紺のPコートの下からはチエック柄のプリーツスカートと言う出で立ち。そこから黒のオーバーニースに覆われた足が伸びる。コートに覆われて判りにくいけど、ほどよく細いすらりとしたモデル体型。結子との身長差がほぼ足の長さの差、と言う現実が彼女の気分を悪くしている。など目立たない要素の方が少ない。

中でも、やはり髪の色がもつとも人目を引く。

「その見た目で人目を引かない方が、それはそれでおかしいと思います」

「そうなんだけれど、あまり理解したくない」

「ちょっといい気味です」

結子はそう言って頬を膨らませ、ピッツと顔を背けてしまう。

どう見ても服の持ち主。コートだけは悠早の物だ。である結

子本人よりも、凡そ似合っただけになっているのが彼女としては面白くない。あらかじめ解っていたことだけれど悔しいものは悔しい。

着替え。主に下着的な意味で。を手解きした時に見た光景が

彼女の脳裏に浮かぶ。

仮想世界なら下着を含めた着替えなど、ワンクリックであった。

人によってはそれも含めて楽しんでいるようなプレーヤーも割りといったようだが、悠早にはそう言う趣味は特になかったらしい。現実ではそうはいかず四苦八苦した拳げ句に結子に教えを乞いに行っ

物自体はインベントリに全てでは無いが、装備品は多少は残っていたので　ロストしている物も多々あって、いまいち残る基準が判らなかった　それを使用した。
ただインベントリの癖に1度取り出したものは2度と収納できない。

引き出すことはできても預けることはできない。

悠早はその半端な制約にこれを与えた何者かに小言の一つも言いたくなくなった。

武器とかどうするんだと頭を抱えたが、解決策は浮かばなかった。

どちらにせよ流石に非現実産だけあって、染み一つない血管が透けて見えるほどの肌の白さ、きめ細かさが強く印象に残っていた。
仮想世界でもあまり身体のラインが出ないような装備ばかりであったため甘く見ていたが、出るところは出て引つ込むところは引つ込んだ体型には『羨ましい』以外の感想が思い浮かばなかった。

思い出せば出すだけ、腹立たしさが喉元まで沸き上がってくる。

とりあえず、八つ当たりだと理解していても止まらない、やめられない。

結子の心情はそんなところだ。

「……………目が笑ってないから？」

「軽い冗談です、イツツアジョーク？」

「なぜ疑問系……………？」

「気、の、せ、い、です」

悠早は一応、妹様の不機嫌の原因は理解してはいた。

だからと言ってどうにかできるような話ではない。

彼から見ればそんな気にするようなことではないように思えるが、彼女にとってはそれなりに大きな問題であるらしい。

感覚の差は埋めようがない。

「はあ……」

「なに溜め息なんてついてるんですか？ せつかく”可愛い”女の子になれたんですから、楽しまないと損ですよ？」

「むしろ何を楽しむのか聞きたいんですが？」

結子は待つてましたとばかりに、ニタリと笑う。

すぐに、それを言わせるんですか？とでも言いたげに頬を赤らめる。

そのまま身を乗り出して上目遣いで見つめている。

(ないからさ………たぶん)

悠差は何も見なかった、聞かなかったことにして、目を逸らす。

「いわゆるTSな訳ですから、することなんて決まってるじゃないですか。むしろお約束は消化すべきだと思いますが、………いかがでしょう？」

「心の底から遠慮いたします」

強い口調で断言する。

妹様は頬を膨らませているが、敢えて気づかないふりだけでもしてささやかな抵抗を試みる。

「姉様はサービス精神が足りません！ 精進すべきですねっ……！」

「後ろ向きに善処します」

要約するならば『NO』である。

暫くは彼女の玩具にされそうだが、と悠早は溜め息を付くことしかできない。

それでも、それで気が少しでも晴れるのなら安いものなのかもしれない、などと損得勘定をしてみるが精神的なダメージを考えると微妙なことに気づく。でも、大赤字にならなければいいと希望的観測をしている。

どちらにせよ前向きに努力し、行動するのは彼の趣味ではない。

「そこはむしろ斜め上方向に飛んでください、是非」

それは無理だよと、悠早は心の中でツッコミを入れた。

銀座の街はまだ遠い。

第1章 最初のオフ会は警察署で。 - 01 (後書き)

補足

Sop : 悠早の武器「Staff of The Proph
et - Elaris Almacina (預言者アルマキナ
の杖)」の略

WIS : Whisper、ささやき、要するに1対1チャット。

なんか妙な略語が出てきたらだいたい装備名かスキル名です。

駅前の個人経営の小さなカフェで物憂げな表情を浮かべている。日本国内のごくありふれた光景の中にあつて、彼女の居る窓際の1席を中心とした区画だけは、異質な雰囲気には満ちている。まるでファンタジー世界を周囲1メートル四方だけ切り出してきて、きつちりと日常の1コマにはめ込んだような、そんな違和感、異物感。物静かに何処かを見つめる彼女は余りにも美しかった。

人によつては天上の女神や天使の姿を思い浮かべるかも知れない。いかにも東欧系の美少女といった顔立ちに、瑠璃色の瞳。ウエーブのかかった細く柔らかなロングヘア。

金色に近い色合いのプラチナブロンドを、黒いレースのリボンでポニーテールに纏めている。

そんな華やかな雰囲気と容姿とは裏腹に、その服装は非常に地味だといつて良い。

それこそ、『それなんて喪服ですか?』とでも問われかねない程の見事な全身黒づくめ。光沢のないゴシック・ドレスの　ゴスロリではない　の上から、ケープ付きのコートを羽織る。今日はそこまで冷え込んでいないと言つのに、これでもかと過剰なほどの防寒装備。

周囲の客が好奇の視線さえ意に介さないと云つた様子。

世間様の一角が大混乱の只中にあると言つのに、駅前の人通りは平常時のように多い。

そんな通りすぎては消えていく人の波を、意味もなくじつと観察している。

クリスマス直前の休みであるためか、やたらめつたらと初々しいものから円熟したものまで様々なカップルの姿が見受けられる。彼らの表情は一樣に幸福そうであり、中には世界中の幸せを独り占め

とでも言いたげな者も居る。なんだかんだで自分達には関係ない、そんな思考の人間は多いらしい。

もつとも、そんな若者の街の一つは壊滅的打撃を受け、絶賛封鎖中である。

そうでなくても彼女はとてもではないが浮かれた気分には程遠かった。

「ほい、つてか……なにを見てるよ？」

「……………うん？」

男が、彼女の前に湯気が立つカフェラテをトンと音を立てて置く。彼女は視線すら動かすことなく、窓に映った姿越しにその声の主を捉える。

その優しい声音に違わない、穏やかな表情の好青年の姿。まあ凡そイケメンの代表、それこそ芸能界に入っても恐らく十分にやっていけるだけの人も羨む美形。それでありながら厭味つたらしさや、鼻にかけているところもなく世の中が不公平という証左とも言える人物。スポーツのイメージで言うとテニス、楽器ならばピアノ、そんなイメージを持つ者が多い。

これで性格やら頭やらが悪ければまだ可愛げがあるのにと、彼女はよく思うのである。

しかし現実には神は2物も3物も与えたようで、トップではないが頭よし、運動もでき、人当たりも良い。性格には若干の難があるが、それでも悪いとか捻くれていたりとか言うわけではなく、むしろ好印象のほうが遥かに強い。

凡そ、非の打ち所が無いような真人間の見本のような人物。

彼は椅子を引くとゆったりと腰を下ろす。

「随分とポーツとしてるな、と、ね？」

「色々と考え事をしていただけです」
「そっか……」

彼女の答えは随分とそっけない。

そんな反応を見ながら、彼は思わず口元が緩む。

そして視線を瞳から頬へ、薄い唇へ。小さな耳から前髪、首筋へ、そして流れるようなポニーテールの先へと視線を移していく。白磁のマグカップの縁を滑るようにして弄ぶ、不健康なほどに白い肌と指の動き。

彼女はそんな舐めるような視線にも特に反応はない。

「まっ、しかし、現実で見ても思わず見惚れる美人さんだなあ……」
「……………」

その言葉に、これまでと打って変わって眉を顰める。

露骨に『不快』と言う表情を顔にしている。

「あのね、真介……こっ恥ずかしいからそっ言う物言いは止めて欲しいわけですが？」

「いやあ、自他共に認めるロリコンの俺でさえありだと認めるぞ」

「それは全く嬉しくない高評価ですね……」

彼女の外見は、年齢的には16から17程度に見られることが多い。

多少は幼い雰囲気を残した顔立ちのせいか、立ち居振る舞いや表情によっては更に数歳年下に見られる事もあった。どちらにしても『少女』というには年を喰い過ぎており、女性と言うにはまだ幼い。敢えて表現するのならば、それこそ『乙女』辺りが適切だろう。

とにかく少なくともロリコンという人種のターゲットになることはまずない。

こういつ時は怒るべきなのか、嘆くべきなのか、喜ぶべきなのか、難しい所であった。

世間一般の女性はこういう時にどんな反応をするのだろうか、くだらない思考の海へ沈む。

「はあ……上手くないもんだ」

彼、高柳 真介は盛大に溜め息をつく。

「でも世界つてのは不公平だよなあ……俺も外見変えてほしかった」
「もつたいないお化けが出るのではないでしょうが？」

彼女は血管が数本切れかけるのを意識しながら言葉を搾り出す。

彼が今の外見を嫌っているわけではないが、別のものに憧れているのをよく知っていた。

胸の前で拳を握って語り始めると、『また始まった』とうんざりした表情に変わる。

あこがれの銃器がどうだ、男キャラとはこうあるべきだという論に始まり、美形重視の和RPG批判やら、メカニックがどうだと、話が脱線に脱線を重ねてあらぬ方向に、流されるままに流されていく。結局のところ、彼としてはハリウッドのゴツイ合衆国軍人のようなタイプのほうが好みだということである。

そして、実際に彼らもプレーするTWにおいて、彼はその理想を具現化するように現実の容姿とは似ても似つかない姿をしている。スキンヘッドに無精髭の生えた顔面と身長180半ば、浅黒く日焼けした肌に包まれた筋肉ムキムキの大男。機関銃やらRPGやらを担いで戦場を駆け回っていても不思議ではないような姿。ゲーム内で古代金属と呼ばれる高性能金属製の鎧を身に纏い、150センチを超える巨大な剣を片手でやすやすと振りまわす。

だからこそ、一見さんの日本人には外国人だと間違いないと思われ

る。

オタクの話はとにかく長い。

彼女は途中からカフェラテを愉しみながら、適当に相槌を打って流す。

「でも、俺としてはやっぱり優男よりもゴツいマッチョの方が好みなんだよなあ……浅黒い肌で、いかにもアメリカンなのが」
「はあ、もう今さら何も言いませんけどね？」

やっと終わったと、小さな溜め息が漏れる。

真介は語り終えたぜという満足感に満たされた笑みを浮かべながら、砂糖もミルクも一切入れないブラックのコーヒーで喉を満たす。彼は別に通ぶっているわけではなく、単に甘いモノが苦手なだけである。家ならば緑茶、外ならばブラックコーヒー、場所によっては紅茶、全てをストレートで飲むのが彼の流儀である。

その姿を野蛮人を見下すような表情で眺められているが、彼は全く意に介す様子はない。

なんでこいつは、と言う彼女の呟きも聞こえていないようである。

「で、優希」

「なんですか？」

「いや、別に口調まで変える必要はないかね？」

その真介の言葉に、彼女は随分と難しい表情に変わる。

彼女と言うより彼、藤宮 優希の中ではまだ全てに折り合いがついているわけではない。

彼もまた、今朝始まった変異に巻き込まれた口であり、仮想世界内の容姿に知らぬ間に変えられていたので一応は被害者である。

彼は彼なりに考え、朝起きてからああでもないこうでもないと思

る舞いを検討してみて、仮想世界のキャラ時と同じようにしていないと落ち着かないという結論に至っていた。さすがに丸6年以上も慣れ親しんでいるので、急に変えようとするのは抵抗があった。自分自身で作り上げてきた物を叩き壊してしまうような恐怖感があったといっても良い。

だから可能な限り、それらしく振る舞っていようと決めていた。彼にとっては割りとどうでも良いことだった。

「気分的なものと言うより、癖ですね」

「いいけどな、呼び方はやっぱり『メイ』の方がいいのか？」

「どちらでもいいですよ……そんな細かなこと」

真介は腕を組み、真剣な顔で考えこんでしまう。

そこまで呼び方は深刻になるような問題なのだろうかと、小一時間問い詰めた気持ちは喉元まで沸き上がってきたのを無理やり飲み込む。そのまま、実際に呼ばれ方を脳内でシミュレーションしてみるが、どれも微妙すぎた。この仮想世界の容姿で居るときにリアルネームで呼ばれるのも妙な気分が抜けないが、現実だというのに仮想世界の名で呼ばれるのもシックリと来ない。

どちらがよいかと言われると、まだ仮想世界の名のほうが考える。

そこまで考えて、それはどうなんだと否定する。

「そっか、それならメイにしておく」

「そっ」

「気分的なものだけどさ、その方がしっくり来るわ」

「そっ言うものですか？」

「そっいつものね」

「いいですけど……」

優希は喉に魚の骨がつつかえたような、そんなすつきりしない表情をしている。

視線が一箇所定まらず、頭が左に右にと規則正しく左右に揺れる。そして時折、何度も何度も頷いたかと思うと、すぐに首を小さく左右に振ってそれを否定する。そんな行動を幾度と無く繰り返し、最後に溜め息を吐く。

結論が出ることはなかったらしい。

真介はそんな様子を微笑ましくも、苦笑いしながら眺める。

「で、メイ的にはどうなのよ？」

「それは、どういう意味の質問ですか？」

「いや、リアルに女になった気分とか？ 一応は大した意味がないんだけど、お約束っていうやつさ」

「あのですね。ここ1年はむしろこちらの身体でいた時間の方が長いんですから……どうも何もありませんよ？ あまりの違和感のなさにむしろ笑うしかないほどですからね」

「へえ……って、やっぱりそういうもんか」

仮想世界TWは現実世界とは時間の流れが大きく異なる。

多くのプレイヤーに様々な時間のプレーを楽しんでもらいたいと言う事らしいが、ゲーム内の24時間が現実世界の凡そ4時間半に等しい。現実時間の1日は仮想世界時間の5日半ほどに相当するため、人によつては体感時間的に仮想世界で過ごしている時間のほうが圧倒的に長いプレイヤーも決して少なくない。

それこそ土日にログインし続けていれば、ほぼ間違いない仮想世界の体感時間のほうが長い。

現実側から仮想世界へはデータを一切持ち込む事ができず、逆にデータを持ち出すこともできない。これが出来れば、仮想世界で勉強やら仕事をしたほうが捗ってしまうなど面倒が起きる可能性を排除するための措置である。それでも、仮想世界では教師や一部の異

常な記憶能力を有する者が、本などを丸暗記し塾や予備校的なことをしているプレイヤーも少数ながら存在している。

運営側も厳しく取り締まるつもりはない事もあり、そういった行為を目的にゲームを始める者も多い。

ただRMTだけは異常に厳しく取り締まられているのが救いだろ
う。

どちらにせよ優希などはかれこれ6年にも渡って慣れ親しんでいる『もう一つの身体』なのだ。

それもここ数年の連続的なアップデートで有り得ないほどにリア
リティーも増していた。

それこそ、肌や皮下の肉の質感から産毛の感触までである。

「でも、真介もそうだと思いますが……力が戻りきっていないから
か妙な違和感がありますよ？」

唯一の違和感は、身体に宿っている力が半端なことである。

今の身体のコンドイションでは仮想世界内ほど俊敏には動けず、
同じように振舞おうとしても意識に身体がついてこられないのは確
実であった。優希はそんな仮想世界の異常な運動能力が必要とされ
るような事態は考えたくもなかったが、全く『ない』とも言い切れ
なかった。しかし、今何かあったとしたら恐らく対応できない、そ
んな怖さを感じている。

それも少しづつであったても、確かにその違和感も埋まりつつある。
完全になるまであと1日、そのくらいだろうと予測している。

「なるほど」

真介も似たような感覚は少なからずあった。

今ならば、恐らく数多くの陸上競技で世界記録を片っ端から更新

して回れる気がしていた。

人間としては規格外もいいところの運動能力、昨日までと何も変わらない身体の何処にそんな力が宿りつつあるのかが不思議で仕方がない。それを言い出すと、目の前の『彼女』、その細く筋肉も殆ど無いような身体に秘められた力の大きさのほうがよほど不思議である。

医者や研究者が泣いて喜びそうだと、そんなことを思う。

そして、何よりももう一つの不思議な感触がある。

「あと、俺だとさ」

真介はお腹の、ちょうど臍の辺りを我が子を撫でるように摩ってみせる。

そこに……、その丁度内側とでも表現するしかない場所に存在する異物の感覚。

実際に何か物質が埋まっているわけではなく、あくまでも感覚的なもの。

「腹のこの辺に、この辺りに武器があるのがわかるんだ。相棒の武器がさ」

真介の仮想世界TWでの相棒である一振りの片手直剣の姿が思い浮かぶ。

それは優希もまた同様であった。

「私もそうですね……真介と違って2本ですが」

「S o EとW o Yか……？」

片方は神器そのもの、もう一方も準神器と呼んで良い高性能武器。彼女を彼女たらしめていた、昨日まではワールド内で1本しか確

認されていないかった武器。地味な見た目ながら圧倒的な存在感を放つ、性能的に神器というに相応しいその『杖』の姿を真介ははつきりと思い浮かべることができると。

それがあるのならば、不思議と安心することができる。

敵に回られると厄介極まりない性能であるが、見方とできるのなら頼もしいものはない。

相当にドベタな支援プレーヤーであってもそれがあれば凡そどうにかなってしまう。

「正解です」

彼女は柔らかく微笑んだ。

第1章 最初のオフ会は警察署で。 - 02 (後書き)

補足

SoE : おなじみの杖、Staff of Elnia。燃費
お察しで攻撃力UP

WoE : 神器級杖、The Wand of ggdrasi
ll。治癒能力大幅UP

Theが付けられている武器がいわゆる神器級装備。

特に頭にTheがつくものは希少、超レア。

別にサーバ内に1本しかないわけではないが、本数は少ない。

優希の服装。

イメージは銀河鉄道999のメートルでどうぞ。

「そういや、午後はどうするんだ？」

「少しオフ会に顔を出そうかと思っています」

真介は『は？』と何を言っているのか判らないと言う表情で呆然としている。

折角の美青年が台無しになってしまっているが、それをツッコまないのは優希なりの優しさ　アジア的優しさという便利なモノである。

実際に優希が彼の立場に入れば似たような反応を返すだろう事は間違いなかった。

それでも、その場のノリと勢いというのは非常に恐ろしいもので、一瞬の躊躇いもなく『問題ない』と回答してしまっていた。朝起きても何が起こったのか良くわからないけれど、気づいたら性別そのものが変わっていた異常事態と、朝方のナチュラルハイな妙なテンションの複合的な産物である。

そして、半時ほど経ってから『何やってるんだろう』と自問自答していたのは別の話である。

ただ優希としては彼の知り合いの多く　首都圏、23区近郊居住者だけであるが　が、参加を決めていた以上は『参加しない』と言う選択肢は存在していなかった。

彼は後悔もしていなければ、反省もしていない。

「ふう……」

たっぷり数分間の沈黙の間に、追加オーダーしたダーズインリンの香りを堪能する。

そして、窓ガラスに映る『それなりに絵になっている』自身の姿

に満足する。

「おいおい、こんな時にそんな企画をしたおバカは誰だよ……とて
もじゃないが正気とは思えねえ」

優希は当たり前だ、そんなのは決まっていると言わんばかりに肩
をすくめる。

その『彼女』の姿を思い浮かべながらどう調理するかと、考えれ
ば考えるだけ楽しみが広がる。

彼女は真介の天敵なのだから。

「お馬鹿って……サイ君がそう言っていたって伝えておきますね？」
「……………誰に？」

2杯目をゴールデンドロップまでゆっくりと注ぐ。
ダーズリンらしい、マスカットフレーバーの甘い香り広がり鼻孔
をくすぐる。

「誰って、ティッシですけど？」

白磁のティーカップを弄びながら優希は淡々と答える。
真介の顔から血の気がツーンと引いていく。

「真介？」

「生きてますか？」

「や、め、て、く、れ」

真介は消えるような声で呟く。

「……………メイ、まだ死にたくないから止めてくれ!!」

ガタンと店内一杯に響くような音と共に立ち上がると無駄に大きな声で叫ぶ。

音の大きさもさることながら、『死』という単語に反応して周囲の客の注目が集まる。しかし、それも割とすぐに若いカップルの痴話喧嘩の類らしいと理解されたようで、生暖かい視線へと変わってしまう。傍から見れば中のよい美男美女のカップルに見えても不思議ではない。

次第に他の客たちは聞き耳を立てながら、自分達の世界へと戻っていく。

そんな中で、優希は真介の予想以上の反応に肩を震わせる。

「相変わらず、ティッシ苦手なんですな…………?」

「いや、むしろあれと普通に話をしてられる人間を尊敬する」

「怯えすぎだと思えます」

そう言いながらも、無理もないと同時に思う。

彼女の放つ威圧感や雰囲気、それを引き立てる容姿と必要以上に恐れられる要素は余りにも多い。ある意味では、仮想世界TWにおいてPKerや廃ギルド以上に恐れられていたと言っても過言ではなかった。しかし、同時に多くのプレーヤーの目標でもあり、優希にとっては仮想世界において1、2を争うほど付き合いの長い、オプベータテスト以来の付き合いの人物であり、戦友であった。

親しい集まりでは『比較的』穏やかな彼女も、外では難しい顔をしていることが多かったのも記憶している。

その辺りが彼女の印象をトツキ難くしているのだと優希は思う。実際に、一睨みされただけでプレーヤーが逃げ出すのも日常茶飯事であった。

そして参加者のリストの中のもう一つの名前を思い出す。

「そう言えばユーリも来るって言ってましたね……………」

「あの人もよくわからんな…………あれと馬が合う時点です」

真介の目は、理解出来ないものを見たようにあまりにも遠い。

「真介の基準はそこですか？」

優希はただ苦笑いすることしかできない。

悠早は1階にあるカフェの椅子に力なくへたり込む。

いかにも慰労困憊といった様子で、表情にも美しさにも影が射しているように見える。

項垂れ、何度も繰り返し溜め息を吐く。

(なんで、女の買い物ってこんなに長いんだ……………)

妹の買い物に付き合わされる度に、彼はそう心底思う。

某デパートと言うか百貨店？に入ってからこれ2時間半近くも、様々なフロアに引きずり回されて居たのである。純粹に彼の服と言っても安全をとって結子と共用できるもの に始まり、下着から、雑貨や小物から食器に調理器具、果ては化粧品までである。

彼は全力で抵抗して見せたにも関わらず、腕力もとい『Ster』値に負けて引きずられていた。満足な抵抗にもならず、何度も転げかけながらずるずると…………彼は早い段階で無意味だと悟って諦めていた。

ステータス的にはS t rで悠早が凡そ30で標準的な支援職よりは少し高め、結子は手数重視のA g i系だがS t r値は70前半である。ざっと2・5倍の差になるが、実際に発揮される力の差となると4倍近くにまで開く。

文字通りに子供と大人の差がある。

(まあ確かにしてないよりは可愛いけど、けど、けど……認めたら負けじゃないか?)

朝とは違って、薄化粧した自身の顔が映る。

元々がノーメイクだったのを良いことに T Wでも化粧はあったがしていなかった、普段ならばまず踏み込むことのない化粧品売り場へと連れ込まれた。様々な香りが混じった鼻を突く空気に当てられて、すぐに気分が軽く悪くなる。

そこまでなら割とよくある話であった。

そのままカウンターに座らされ、なされるままに意味不明な用語を聞き流しているうちに化粧を施されてしまった。元々が色白で、あまり健康的な印象ではなかったのが、唇に赤味を加えるだけで随分と健康的に見え、印象が変わっている。

彼から見れば何がどうなったか判らない。

結子は真剣に色々と質問していたが、それが耳に入っているわけもない。

それでも、確かに数割り増しくらいで可愛かったことを認めるのはやぶさかではないと言う微妙な心境。これを認めると何かが終わってしまいそうな気がしていた。

疲労感の大半は精神的なものに間違いない。

「ああ……疲れた」

そんなお疲れの様子のお悠早とは打って変わって、結子は鼻唄混じ

りの様子。

買ったものは流石に宅配にしてみましたので身軽だ。

「私は全然疲れてなんていませんよ、むしろ楽しかったです。でも、体力的には問題なさそうに見えますけれど、姉様？」

彼女は意地悪そうに言う。

「主にメンタル的な意味で……ね？」

「姉様は随分と繊細で柔らかな精神をお持ちなんですね、驚きました」

「いや、あのね………ゆい」

どうして妹にここまで良いようにされているのだろう。と悠早は頭を抱えたくなる。

そんな様子を眺めながら結子はクスリと笑って、肩をすくめる。

「冗談です」

これからオフ会でケーキを食べると言うのに、結子はシブーストを口へと運ぶ。

蜂蜜漬けのリンゴと、クリームの甘い香りが悠早を悩ませる。

彼も主に結子や、やたら甘いモノが好きで仮想世界の友人たちの影響で、今ではすっかりスイーツというものに目がない。流石に一人が入っていくような度胸はなく、妹とよく食べに行くほどである。だからと言って、『甘い物は別腹』と言えるほど胃袋は大きくない。

今ならいけるかも知れないと思いながら、紅茶だけで必死に我慢する。

結子は知らない間に物欲しげな表情をしている悠早を見て口元が

ニヤつく。

「でも、サイズが同じで済むので助かりました」

「戻っても無駄にはならないしね」

「本当に……ああ、もう、ちょっとだけ恨めしかったりもします」
「聞こえない」

悠早は何度も首を横に振る。

それに合わせて長い銀の髪が揺れ、乱れる。

「あと1時間と少しありますね」

「このままゆつくりしたいんですが……」

結子は次に何を見に行こうか、どうしようかと思考を巡らす。

家の茶葉が残り少なくなってるから買いに行こう、新しいブランドを買ってみるのも良いか、何処のブランドにしようかと紅茶の在庫を思い出す。それ以外にもまだまだ、買っておきたいもの、見ておきたいものは山のようにあった。

彼女はここでへたっている訳にはいかない。

「だらしないですね……そんなんでどうするんですかっ!？」

「そんなんでいいよ………そんなんで」

「………はあ」

結子は仕方が無い思いながらも、醒めた視線で兄をじっと見つめる。

まるで丁度よい玩具を見つけた子供のような、そんな表情をしているように悠早には見える。

怯える草食動物のように身体が小さくなっていく。

「何で溜め息を……………っ!?!?」
「!?!?!?」

爆発音と思われる重低音が二人の耳に響く。
それも至近距離だと判るほどの大きさ。

明らかに交通事故による衝突音とは異なり、なにか巨大な物体…
…杭か何かを地面に打ち付けたようなそんな音であるように悠早は
感じた。それこそバンカーバスターでも打ち込むか、地下でトン単
位の火薬でも爆発させればこんな音がするのではないか、と彼は思
う。

しかし現実にはそんなことは起こりえるわけではない。
大規模なテロによる破壊活動の可能性が悠早の脳裏をよぎる。

日本はまだ比較的平和であるが、世界的にはテロ活動は2000
年以降は沈静化する様子もない。

むしろより大規模に、より過激になってきているとすら言われて
いる。

「なんの音ですか……………今のって?」

「何だろう? 交通事故か何かでもあったのかなあ……………」

しかし悠早が気になった事があった。

交通事故はありえないが、大規模な爆発というには爆風が吹き荒
れたようには見えない。

少なくとも窓の外は平穏そのものであった、そのように見えてい
た。

それから間を置かず悲鳴が聞こえてくる。

それは徐々に大きく、多数の叫びへと変わってくる。

「さあ、見に行きましょう!」

結子の言葉にだらしなくあんぐりと口を開けて固まる。

「すごい野次馬根性だね、ゆい？」

「事件は現場で起こっているんです！ 話の肴のためにも、私の知的好奇心を満たすためにも、精神の安寧のためにも是非行きましよう！」

「いやいや、じっとしていようよ？」

「姉様は私が夜にあれが気になって気になって眠れなくなってしまつても良いと言つんですか！？」

「意味判らないから」

悲鳴以外が収まつたかと思うと、突如としてまるで雷が落ちたような音が連続して響く。

途切れることなく12回、それは最初の1発も考えればテロというには余りにも大規模にすぎる。

それに混じって聞こえた獣の遠吠え。

「えつと、なんだろう……この嫌な感じ？」

「さあ姉様、俺この戦争が終わつたら結婚するんだ的なノリで行きましょう！」

「死亡フラグは勘弁して欲しいね？」

逃げなければ死亡フラグが立つと、そんな予感を悠早は覚えていた。

第1章 最初のオフ会は警察署で。 - 03 (後書き)

すごい前回の切り方が中途半端ですが気にしてはいけません。
あと、あちこち直します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1926z/>

ネットゲエの世界よ、ようこそ！（仮題）

2011年12月16日01時55分発行